平成29年10月20日発行・季刊発行・第578号
ISSN 0913-1469

世界と議会

World and Parliament

一般財団法人
尾崎行雄記念財団
www.ozakiyukio.jp

2017 秋冬号

特集：①尾崎行雄「日米友好の証」―桜とハナミズキ

特別インタビュー
「ＮＰＯ法人咢堂香風の取り組み
― 咢堂精神の普及と世界平和に向けて」／土井　孝子

特別寄稿
日米友好の証「ポトマック桜」―百年の時を経て／石田　尊昭

特集：② 世界情勢と日本の安全保障

財団設立60周年咢堂記念シンポジウム
「激動する世界情勢と日本の未来
―我が国の安全保障・国際貢献のこれから」
／小川　和久／伊勢﨑　賢治／伊藤　祐靖／桜林　美佐

連載『尾崎行雄伝』
第八章　大同団結

世界と議会（平成二十九年秋冬号　第五七八号）
平成29年10月20日発行・季刊発行・第578号
〒100―0014　東京都千代田区永田町1―1―1　TEL 03―3581―1778
世界と議会（第五七八号）

尾崎行雄記念財団様と共に歩ませて戴き お蔭さまで創業56年を
迎えました　これからもお引き立ての程よろしくお願い致します

― 都会のオアシス ―
レストラン 霞ガーデン

代表取締役　渡辺 隆一
東京都千代田区永田町1-1-1　憲政記念館内
Tel 03-3581-1655
Fax 03-3581-9941

『世界と議会』
（秋冬号）目次

咢堂言行録 ……（２）

特集：① 尾崎行雄「日米友好の証」―桜とハナミズキ

特別インタビュー
「ＮＰＯ法人咢堂香風の取り組み
― 咢堂精神の普及と世界平和に向けて」……土井　孝子（４）
（ＮＰＯ法人咢堂香風 理事長）

特別寄稿
日米友好の証「ポトマック桜」―百年の時を経て……石田　尊昭（14）
（尾崎行雄記念財団理事・事務局長）

特集：② 世界情勢と日本の安全保障

財団設立 60 周年咢堂記念シンポジウム
「激動する世界情勢と日本の未来
―我が国の安全保障・国際貢献のこれから」……（18）

パネリスト　小川　和久（静岡県立大学特任教授）　伊勢﨑　賢治（東京外国語大学大学院教授）　伊藤　祐靖（元海上自衛官）

コーディネーター　桜林　美佐（防衛問題研究家）

連載『尾崎行雄伝』 第八章　大同団結 ……（48）

財団だより……（56）

号堂言行録

政党・議会の本質

立憲政治に政党はつきものである。つきものというよりも、立憲政治は政党がなければ、やっていけない政治である。…私はほとんど過去半世紀以上にわたり、あらゆる非立憲的勢力をはねのけて、名実兼ね備える政党政治を実現することに尽力してきた。そしてこの目的を達成するためには、何としても本当の政党をつくらなければだめだと思って、ずいぶん骨を折ってみたが、どうしてもだめであった。政党の形だけはすぐできるが、それに公党の魂を入れることがどうしてもできない。なぜだろうと考えてみた。

思うに、それは日本人の思想・感情がまだ封建時代をさまよっているために、利害や感情によって結ばれる親分子分の関係と同型の私党はできても、主義・政策によって結ばれ、国家本意に行動する公党の精神は、どうしても理解できないのであろう。力をめぐって離合する感情はあっても、道理をめぐって集散する理性がないからであろう。

一般人民から選ばれた代表が一堂に会して会議を開くのは、何のためか。言うまでもなく、それらの代表が、どうすることが最大多数の最大幸福であるか、どうすれば国家の安全と繁栄を確保できるかという立場にたって、思う存分に意見をたたかわせる。そして、緊張した各代表が、何ものにも縛られない完全に自由な良心を持って、議案の是非善悪を判断した結果、多数の賛成を得た意見を取り上げて、民意を政治に反映させるためである。

ゆえに真正の会議においては、少数党の言い分でも、正しければ多数の賛成を得て可決され、多数党から出した議案でも、議場の討論において、多数議員の良心を引き寄せることができなければ否決されるのでなければならない。もし多数党の言い分なら何でも通り、少数党の言い分であれば何一つ通らないということが、会議を開く前からわかっているなら、会議を開くことは、全く無用・無意味な暇つぶしである。

二〇一三年『民主政治読本 復刻版』より

昭和25年6月、米ワシントン、ポトマック河畔の桜並木にて（左は雪香、右は行輝）

人の世は
移り変われど
この花は
永く栄えて
好意結ばん

（ポトマック河畔の桜に寄せて）

昭和二十五年

尾崎行雄

特集

① 尾崎行雄「日米友好の証」―桜とハナミズキ

【特別インタビュー】

「NPO法人咢堂香風の取り組み
―咢堂精神の普及と世界平和に向けて」

土井 孝子
（NPO法人咢堂香風 理事長）

土井孝子（どい・たかこ）
一九四一年、三重県伊勢市生まれ。宇治山田高校卒業後、池坊短期大学で華道を学び、現在池坊華道教授。尾崎咢堂の生き方・考え方に感銘を受け、一九九四年、咢風会「香風（こうふう）」を立ち上げ、代表を務める。九九年、「全米さくら祭り」に親善使節団を結成し訪米。以降相互親善交流を重ねている。二〇〇六年、咢風会香風をNPO法人に発展させ「NPO法人咢堂香風」を設立し、その後、理事長に就任。日米親善と若い世代への咢堂精神の普及啓発活動に意欲的に取り組んでいる。株式会社 光洋 常務取締役、伊勢市在住。
※上の写真は、当財団設立六十周年「感謝の集い」（二〇一六年、憲政記念館）にて、当財団会長の大島理森・衆議院議長より特別感謝状と記念楯を授与される土井孝子氏。

「尾崎咢堂」をもっと知ってほしい

――現在の伊勢を選挙区とした尾崎行雄（一八五八―一九五四）は、第一回総選挙から第二十五回まで連続当選し、六十年以上も衆議院議員を務めるという偉大な記録を打ち立てました。そんな尾崎に対して、どのような思いをお持ちですか。

土井 私は伊勢で生まれ育ち、幼い頃から尾崎行雄の名前はよく耳にしていました。そして、自分でいろいろと調べて学んでいくうちに、尾崎行雄の志や生き方に深く共鳴するようになったんです。

伊勢の人たちは、尾崎行雄のことを親しみを込めて「咢堂（がくどう）さん」と呼んでいます（咢堂は尾崎の雅号）。咢堂さんは、知れば知るほど奥が深いんですね。確かに、当選回数も在職期間も、議会史に残る記録を持っていますが、それよりも大切なことは、やはり政治家としての信念や生き方だと思うんです。どういう信念、志で政治に取り組み、どんな人生を送ったのか。そこを多くの方と一緒に考え、伝えていきたいと思っています。

実は伊勢でも、尾崎咢堂について名前や記録は知っていても、そこから先はあまり…という人も少なくないと聞きます。せっかく伊勢が「生んだ」偉人ですから、少なくとも伊勢の人たちにはもっと知ってほしいです。

宇治山田駅の目の前に伊勢市観光文化会館というのがあって、いろいろなイベントやコンサートが行われているんですが、そこは伊勢だけでなく他県からも多くの人が訪れます。その正面に、ぜひ咢堂さ

2014年6月、伊勢市観光文化会館の正面に建立された「尾崎咢堂像」。

んの胸像を建てて、日本全国の人に知ってもらいたいと思いました。そこで二〇一四年、私が発起人の一人となって、地元はもとより全国の関係者に寄付を募って、その年の六月、ついに胸像が建立されました。そして、光栄なことに、その台座に刻まれる「尾崎咢堂像」という文字を私が書かせて頂きました。咢堂さんという存在、彼の志や生き方を、伊勢から日本全国へ、さらには世界へも発信できればと思っています。

今こそ必要な咢堂精神

――「憲政の父」とも呼ばれる尾崎行雄は、九十五歳で亡くなる前年まで衆議院議員として活躍しましたが、若い頃は新聞記者として民権運動を盛り上げ、また東京市長を九年間務めるなど、その活躍は多岐にわたります。尾崎の数ある業績の中で、最も伝えたいことは何ですか。

2011年、宇治山田高校の同窓会にて記念講演「伝えたい咢堂の心」を行う土井さん。

土井 ご存じの通り、尾崎咢堂は憲政擁護運動や普選運動、軍縮運動など、歴史に残る重要な取り組みをたくさんしています。特に、東京市長時代にアメリカに贈った桜のエピソードは、まさに今、私たちのNPO法人「咢堂香風（こうふう）」が力を入れて語り継いでいる業績の一つです。

咢堂さんの取り組みは、一つ一つが全部大事なものばかりで、「これが一番」とはなかなか言えないですね（苦笑）。ただ、そうした取り組みの原点には、咢堂さんの「民主政治と世界平和への思い」があったと思うんです。どうやったら国民が幸せになり、世界が平和になるのか―。国民のため、世界のために何ができるのか―。常に世界的視野を持って、言論の力を信じ、民主主義と平和を実現しようとした咢堂の志は、今を生きる私たちにこそ必要なものではないでしょうか。「今こそ咢堂精神を！」と言いたいですね。

次代を担う子供たちへ

――NPO法人「咢堂香風」を立ち上げるきっかけや、これまでの歩みについてお聞かせ下さい。

土井 伊勢の人たちに咢堂さんのことをもっと知ってほしい。そのためには、尾崎咢堂をみんなで学び、次の世代にしっかりと語り継ぐ機会が必要だと思い、一九九四年に、咢風会「香風（こうふう）」を立ち上げました。

香風では、講演会や勉強会を定期的に開催し、さらに国際親善交流も行うようになりました。そして十数年間、地域の方々と一緒に草の根の活動を続け、二〇〇六年にNPO法人「咢堂香風」となって現在に至っています。また、二〇一〇年度からは「伊勢市立尾崎咢堂記念館」の管理運営にも携わり、記念館を通していろいろな草の根活動を推進しています。

私たちの会は、咢堂精神の普及を目的としていますが、特に伊勢や日本の未来を担う子供たちに咢堂さんの心を伝えようということで、一九九六年から毎年、伊勢近郊の小・中学生を対象に「尾崎咢堂読書感想文コンクール」という事業を続けています。第一回の応募者数は、わずか十名でしたが、回を重

ねるごとに百名、三百名と増えていって、昨年（二〇一六年）は五百二十一名、これまでの二十一年間で九千名を超える子供たちが応募してくれました。そして何より、一つ一つの感想文が本当に素晴らしいんです！ はっきり言って、咢堂さんのことを大人よりも理解しているんじゃないでしょうか（笑）。

毎年一回、「尾崎咢堂生誕祭」を尾崎咢堂記念館（伊勢市）で開催していますが、そこで感想文の優秀者に、市長賞、議長賞、教育委員会賞などを授与しています。この生誕祭では、授賞式のほかに、一般の方々と一緒に子供たちにも咢堂精神の講演を聴いてもらっています。特に近年では、地元の地方議会議員のみなさんと子供たちが輪になって「地域の未来について語り合う」という企画を続けており、大変好評を博しています。

あと、小学生を対象に、七年前から「さくらの写生コンクール」を毎年春に開催しています。桜の写生を通して、咢堂さんをはじめ桜に関わった人々に思いを馳せながら、郷土を愛する気持ちを育てたいという思いから続けています。これも、伊勢市内の全小学生の一割ほどの応募をいただくまでになり、年を追うごとに反響が大きくなっています。

咢堂さんも、常に若者に期待を寄せていました。私たち咢堂香風も、伊勢や日本をこれから支えていく若者・子供たちに、咢堂さんの心や生き方をもっと伝えていきたいと思います。

2016年・第７代「花みずきの女王」認定式。右が土井さん。左が女王・伊藤小百合さん。

桜とハナミズキ―伊勢から世界へ

――アメリカのワシントンＤＣでは毎年春に「全米さくら祭り」が開かれ、「全米さくらの女王」が選ばれます。咢堂香風といえば、日本で唯一「花みずきの女王」を選出し、「全米さくらの女王」との交流を図るなど、国際親善にも力を入れていますね。その活動についてお聞かせ下さい。

土井　一九九五年に、「全米さくらの女王」と親善訪問団が初めて伊勢の尾崎咢堂記念館に来館されました。それをきっかけに、私たちの会では一九九八年に初代「花みずきの女王」を選出し、翌九九年に親善使節団を結成して「全米さくら祭り」に参加しました。

なぜ「花みずきの女王」かといいますと、一九一二年に、当時東京市長だった尾崎咢堂が東京市から米ワシントン市に三千本の桜を贈り、その三年後、返礼としてウィリアム・タフト米大統領からハナミズキが日本に贈られてきたからです。

一九九五年以降、「全米さくらの女王」は毎年伊勢を訪問され、私たちのコーディネートで伊勢神宮への参拝や、三重県知事・伊勢市長への表敬訪問、尾崎咢堂記念館への訪問、各所での記念植樹などを行っています。

私たちが大切にしているのは「心の触れ合い」なんです。訪問先での交流や歓迎行事の際にも、女王たちと地域の人たちがお互いに心を開いて、たとえ短い時間であっても真の友情が育めるようにと、いろんな工夫をしています。形だけではなくて心が通じ合うことが本当の親善交流だと思うんです。女王たちは、伊勢から離れるときに必ず「伊勢と日本の自然の美しさ、そして何より一人一人のあたたかい心、思いやりの心に触れることができて感激しまし

2014年4月、伊勢神宮内宮（ないくう）にハナミズキを植樹するキャロライン・ケネディ米大使（中央）と土井さん（左隣）。大使の右は鈴木英敬・三重県知事。土井さんの左は鈴木健一・伊勢市長。

た」と言ってくれて、別れを惜しんでくれるんです。

一方、私たちの会も、先ほど言いましたように、一九九九年を皮切りに、これまでに七回、ワシントンの「全米さくら祭り」に参加しています。二〇一二年（米国への桜寄贈百周年にあたる年）には、鈴木健一・伊勢市長も参加されました。この祭りでは、「全米さくらの女王」を決めるグランドボール（大舞踏会）が開かれますが、私たちの「花みずきの女王」もその会場でお披露目されます。またパレードもあるんですが、そこで「花みずきの女王・準女王」たちもオープンカーに乗り、沿道の人たちから拍手喝采を受けます。その他、使節団全員で大使館や公的施設を訪問し、日本や伊勢のアピールに努めています。

来年（二〇一八年）も使節団をつくって訪問する予定ですが、人と人の触れ合い、心の交流を大事にしながら、日本や伊勢の素晴らしさをアメリカのみなさんに存分に伝えてきたいと思っています。

国際交流という点でいえば、二〇一四年四月に、キャロライン・ケネディ米国特命全権大使（当時）が伊勢神宮でハナミズキの植樹を行って下さいました。実はこれは、私がケネディ大使に直接お手紙を書いて送り、その後、鈴木健一・伊勢市長と、鈴木英敬・三重県知事のお力添えがあって実現したものなんです。

尾崎咢堂がアメリカに桜を贈って、ちょうど百年にあたる二〇一二年に、アメリカの国務省と日米交流財団などが「友好の木―ハナミズキ・イニシアチブ」を開始して、東北被災地を含む日本全国へ三千本のハナミズキを贈ることを決めました。私はぜひ伊勢神宮に植樹して頂きたい、そしてケネディ大使にお越し頂いて、大使の手で直接植樹して頂きたいと強く思ったんです。今から思えば畏れ多い気もしますが、そのときはとにかく大使に植樹して頂きたい一心で、つい図々しくお手紙を出してしまいました（苦笑）。ケネディ大使、そしてご協力頂いた皆様に本当に感謝しています。

1996年、伊勢の尾崎咢堂記念館リニューアル記念式典にて記念植樹を行う相馬雪香さん（左）と土井さん（隣）。

咢堂三女・相馬雪香さんへの思い

――「咢堂香風」の「香」の字は、相馬雪香（そうまゆきか）さん（一九一二―二〇〇八）の名前から一文字いただいたと聞いています。相馬さんといえば、尾崎行雄の三女で、当財団の副会長を長年務めていました。日本のNGO「難民を助ける会」や、リーダー育成を目的とした「咢堂塾」を創設するなど、社会貢献活動を積極的に行っていた相馬さんに、どのような思いをお持ちですか。

土井　「香風」を立ち上げる前から相馬さんとは交流があり、東京の憲政記念館（旧尾崎記念会館）を

訪れたときは、よく政治や社会のお話を伺っていました。相馬さんはとても情熱的で、言葉に「力」がみなぎっていて、私はお会いするたびに相馬さんから元気をもらっていました。

会を立ち上げようとしたとき、相馬さんの顔が真っ先に浮かんだんですね。もちろん尾崎咢堂の娘さんということもありますが、それ以上に、相馬さん自身の情熱や行動力、生き方を少しでも学んで、会の活動に役立てたいという思いがありました。

一九九六年に開催した「尾崎咢堂記念館」リニューアル記念式典にもご出席頂きました。その後も毎年、「尾崎咢堂生誕祭」や記念行事の際に尾崎財団の石田事務局長と一緒に伊勢にお越し頂き、地元の人たちと交流を深めて頂きました。相馬さんと触れ合うと、大人から子供まで、みんな元気になるんです（笑）。

尾崎咢堂と相馬雪香さん――お二人の名を冠する「咢堂香風」ですから、これからもお二人の遺志をしっかりと引き継ぎ、次代に繋げていきたいと思っています。

世界平和―できることから始める

――土井さんの行動力、そして「咢堂香風」による伊勢から世界に向けた取り組みは、まさに相馬雪香さんの活動を想い起こさせます。土井さんが活動するにあたって、常に心掛けていることは何ですか。

土井　私は、相馬さんの言葉の中で、とても印象に残っているものがあるんです。それは、「自分にできることから始める」というものです。相馬さん自身、まさにそれを実践されていたと思うんですね。大きな目標、高い目標を持つことは大事ですが、まずは自分にできることから、着実に第一歩を踏み出していくことの大切さを教えて頂きました。

相馬さんが亡くなられた翌年（二〇〇九年）に、尾崎財団の石田事務局長が書かれた『平和活動家・相馬雪香さんの50の言葉』という本があります。

その中に次のような一節があるんです。

「平和、平和って言うけど、誰でも、最初から大きなことはできないの。とにかく、できることから始める。自分から動く。少しずつでいいんです。あなたにできる平和から始めなさい！」――相馬さんの言葉です。

咢堂さんが求めた世界平和という大きな目標。それを実現するために、今の私に何ができるのか。また、「咢堂香風」に何ができるのか。いきなり大きなことはしなくていい。まずは自分にできること、会としてできることを確実に一歩一歩やっていって、少しでも前に進めていくことが大切――そんな思いで日々取り組んでいます。

これからが「人生の本舞台」

――最後に、今後の抱負についてお聞かせ下さい。

土井　先ほどの「50の言葉」の中に、次のような相馬さんの言葉があります。

「一人じゃ何もできないわよ。仲間をつくんなきゃ。だけどその仲間をつくるには、あなたから言い出さないと始まんないわよ。この指とまれ！って。さあ、やってごらんなさいよ」

何事も一人ではできません。仲間を増やし、協力し合って、助け合って、活動を広げていく。「咢堂香風」が続いているのも、地元のみなさんの力なんです。みんながそれぞれ知恵と力を出し合って、ここまでやってこれました。これからも、地域のみなさんと一緒に、仲間を増やしながらどんどん前に進んでいきたいと思います。

そしてもう一つ。「人生の本舞台は常に将来に在り」―これは咢堂さんが七十代半ばにさしかかったときに発した言葉です。昨日までは人生の準備期間で、今日以後が本舞台なんだという、とても前向きな、力が湧いてくる言葉です。この言葉を胸に、咢堂さんや相馬さんがそうであったように、私も〝生涯現役〟で頑張っていきたいと思います！

（了）

特集

① 尾崎行雄「日米友好の証」—桜とハナミズキ

【特別寄稿】

日米友好の証「ポトマック桜」—百年の時を経て

石田 尊昭
（尾崎行雄記念財団理事・事務局長）

本稿は、尾崎行雄の桜寄贈百周年にあたる二〇一二年三月に、国際通信社ＩＮＰＳＪのウェブサイトに掲載された記事に一部加筆したものです。

毎年春になると、ワシントンＤＣのポトマック河畔に咲き誇る桜並木が話題になる。この桜は、今からちょうど百年前、当時東京市長を務めていた尾崎行雄が東京市参事会に諮り、市から「日米友好の証」として公式に寄贈したものである。といっても、尾崎一人の「想い」で実現したわけではない。その背景には、当時の日米両国におけるさまざまな人たちの強い想いと尽力があった。その一端を紹介したい。

一九〇九年、ヘレン・タフト米大統領夫人は、ポトマック河畔の景観整備を検討していたが、それを絶好の機会と捉え、夫人に日本の桜の植樹を勧めた人がいた。米国ジャーナリストで女性として初めてナショナルジオグラフィック協会の役員にもなったエリザ・シドモア女史である。一八八四年に来日したシドモア女史は、桜を愛でる日本人の心と文化に深く感銘を受けるとともに、桜の美しさに魅了された。帰国後も、その美しさを忘れることができず、なんとかして日本の桜をワシントンに植樹したいと考えるようになった。その後二十四年間にわたって、植樹のための募金活動や、当局への働きかけをしていた女史にとって、今回の整備計画は逃すことのできない千載一遇のチャンスだった。

また、米農務省にいた植物学者デヴィッド・フェアチャイルド博士も、種苗の研究調査団の一人として一九〇二年に来日して以来、日本の桜の美しさに心を惹かれた一人である。その想いは強く、米国の土地で日本の桜が生育可能かどうかを研究するためメリーランド州チェビー・チェイスの自邸に若木を植栽するほどだった。博士は、親交の深い昆虫学者チャールス・マーラット博士とともに友人たちを招いて観桜会を開催したが、友人の招待客の中にシドモア女史がいた。女史と両博士はその場で意気投合。両博士の賛同と協力を得たシドモア女史は早速、大統領夫人に桜植樹を提案しに行った。実は大統領夫人も一九〇五年に来日し桜の美しさに触れていたことから、この提案を快く受け入れ、ポトマック河畔への桜植樹計画が動き出した。

もう一人は、ニューヨークに在住していた著名な化学者で実業家の高峰譲吉博士（タカジアスターゼ、アドレナリンの発見者。在留日本人会初代会長）である。対日感情の改善と日米親善に長年取り組んでいた博士は、自身も桜並木をつくる計画を持っており、ニューヨーク市に陳情し続けていた。

タフト大統領夫人の意向を知った博士は、今回のポトマック河畔への桜植樹計画に対し、日本から桜二千本を寄贈することを提案し、さらに、その費用は自分を含む在留日本人の有力者たちで分かち合うことまで提案した。それを聞いた水野幸吉・ニューヨーク総領事は高峰博士の発想を高く評価するとともに、桜は東京市の名義で寄贈されるべきとの提案を行った。そしてタフト大統領は、日本からの桜

二千本寄贈の提案を受け入れた。

その後、水野総領事や高平小五郎駐米大使らによる調整の末、桜は日本の首都・東京市から公式に寄贈すべきということになり、外務省から東京市に打診があった。尾崎東京市長は以前から、日露戦争（一九〇四～〇五）の際に好意的だったアメリカへの感謝の気持ちを何らかの形で表したいと考えていたため、「日米友好の証」として桜を贈ることを決意し市会に諮った。そして一九〇九年八月、東京市会は、桜苗木二千本をワシントンDCへ寄贈することを決定した。

しかし、翌年一月にワシントンDCに到着した桜は、検疫官によって害虫が発見されたため、これらの桜の苗木すべてを焼却処分にせざるを得なかった。それを知った尾崎市長は、健全かつ優良な苗木を育成し、再び贈ることを市参事会に諮り、同年四月に決定した。そして一九一二年三月、害虫も病気も無い桜の苗木三千本がワシントンDCに到着し、無事ポトマック河畔に植樹された。ちなみにその苗木は、当時の専門家が驚くほど優良で、完璧な出来栄えだったという。

また、桜寄贈から三年後の一九一五年には、その返礼として米国からハナミズキの苗四十本が贈られ、東京市内の公園や植物園に植栽された。日本国民への返礼の花にハナミズキを選定したメンバーの一人に、上述のフェアチャイルド博士もいた。彼は、米国の子供達が日本の桜を愛でるとき、日本の子供達にも米国のハナミズキを観て喜んでほしい、そうすることで日米友好の絆を深めてほしいという強い想いを持っていた。

ポトマック桜について、もう一つ忘れてはならないことがある。一九三八年、ポトマックに隣接するタイダル池に米国建国の父の一人トーマス・ジェファーソン第三代大統領の記念堂が建設される際、三百五十八本の桜の木を切り倒すことが計画された。しかし伐採の当日、ワシントンDCの婦人団体が、自分の体を木に縛り付け抵抗し、二百七十本の桜の命を守り抜いた。

ヘレン・タフト大統領夫人、エリザ・シドモア女史、デヴィッド・フェアチャイルド博士、チャールス・マーラット博士、高峰譲吉博士、尾崎行雄東京市長、そしてワシントンの婦人団体…。もちろん、このほかにも、多くの有名無名の人たちの努力があったことは言うまでもない。特に、二度目の桜寄贈に向け、国の威信をかけて健全な苗の培養に取り組んだ一人に、静岡県興津の農商務省農事試験場園芸部の主任技師・熊谷八十三（後に東京都立園芸高等学校初代校長となる）がいる。その他、専門家や職人、地域の人々の苦労は計り知れない。ポトマック桜は、そうした先人たちの想いと尽力によって実現し、守られてきたものである。

その桜のもとで、今年（二〇一二年）もまた「全米さくら祭り（National Cherry Blossom Festival）」が三月二十日から四月二十七日の五週間にわたって開催されている。祭りでは、さまざまなプログラムを通じて昨年三月十一日に発生した東日本大震災の被災者支援の取り組みが行なわれている。特に今年は、被災地・福島の小中学生による太鼓演奏やパレード参加などが予定されている。百年の時を経て、今また両国民による新たな「想い」が、日米友好の「絆」を深めているように思える。

（二〇一二年三月記）

米ワシントンDC、ポトマック河畔の桜並木

特集

② 世界情勢と日本の安全保障

【尾崎財団設立六十周年咢堂記念シンポジウム】

「激動する世界情勢と日本の未来
―我が国の安全保障・国際貢献のこれから」

憲政記念館の尾崎行雄像

本稿は、当財団設立六十周年記念事業の一環として、去る七月二十二日に憲政記念館にて開催した記念シンポジウムでパネリスト三名が行った講演を編集したものです。（※本会における参加費収益はすべてNPOを通じて東北復興支援に役立たせて頂きました。開催にあたっては、公益財団法人偕行社の後援、ミクニ総業株式会社・大橋物産株式会社・タカラベルモント株式会社の協賛、NPO法人一冊の会の協力を頂きました。）

パネリスト

小川和久（おがわ・かずひさ）
陸上自衛隊生徒教育隊・航空学校修了。外交・安全保障・危機管理分野で政府の政策立案に関わる。静岡県立大学特任教授。国際変動研究所理事長。著書に『戦争が大嫌いな人のための正しく学ぶ安保法制』（二〇一六）ほか。

伊勢﨑賢治（いせざき・けんじ）
NGO・国連職員として世界各地の紛争処理、武装解除に当たった実務家としての経験を持つ。東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授。著書に『テロリストは日本の「何」を見ているのか』（二〇一六）ほか。

伊藤祐靖（いとう・すけやす）
元海上自衛官。自衛隊初の特殊部隊特別警備隊の先任小隊長を務めた後、二等海佐で退官。予備役ブルーリボンの会幹事長。著書に『国のために死ねるか―自衛隊「特殊部隊」創設者の思想と行動』（二〇一六）ほか。

コーディネーター

桜林美佐（さくらばやし・みさ）
防衛問題研究家。安全保障・国防問題を中心に取材・執筆。国防・自衛隊についての分析・評論に定評。著書に『武器輸出だけでは防衛産業は守れない』（二〇一三）、『自衛隊の経済学』（二〇一五）ほか。

「平和構築と国益」

小川　和久
（静岡県立大学特任教授）

皆様こんにちは。小川でございます。お手元にお配りした一枚紙のレジュメに沿ってお話をいたします。

このレジュメには「平和構築と国益」というタイトルをつけております。実はこれは私がオーストラリア政府から研究助成金を八百万円ほどつけてもらって調査をして、オーストラリア政府と日本の総理大臣・外務大臣に出した報告書のタイトルなんです。

日本の国際貢献について、一九九二年のカンボジアＰＫＯ以来、時の総理大臣のもとで関わってきたんですけれども、日本はどうしても思想哲学の部分で遅れているんですね。それに引き換えオーストラリアは思想哲学、つまり戦略にあたる部分が、極めて明確になっている。だからオーストラリアの専門家だけではなくて、アメリカの専門家あるいは国連のＰＫＯ局などは、聞き取り調査をやり英語と日本語で報告書を出したわけであります。

やっぱり国際貢献そして平和を作り出すということは、国益の問題であるということがオーストラリアも、あるいはアメリカも明確になっている。日本はなんか中途半端な考えのもとに自衛隊を出していますので、それはちょっと整理しなければいけないよって話なんですね。

そこで今の国際安全保障環境がどういう格好になっているのか、それについて僕らはどう考えるべきなのかというお話をレジュメに沿ってお話しします。

国家主体の戦争は起きにくくなっている

今、世界では、二つの流れが同時進行している。

国同士の戦争は起きにくくなっている。これは軍事力を整備し抑止力を高める。必要な法律や制度を整備していく。お互いに戦争したくないからね。とにかくその辺は起きにくくなっているんです。

ただ、非国家主体というようなものの脅威は、これはなかなか無くならない。これは国ではないけれどヤバイ勢力ですよね。ＩＳいわゆるイスラム国、あるいはアルカイダ、そういったもの。これについては共通の脅威と位置付けながら、アメリカもロシアも中国も日本も対処しようとしている。

そういう流れの中に、今や国連の平和維持活動ＰＫＯも位置付けなくてはいけないところがある。そういうことを我々はおさえながらやっていかなくてはならないという話なんですね。

最初に国家同士の戦争は起こりにくくなっているという話をします。

最近、『日米同盟のリアリズム』という本を出しまして、その中にたっぷり書いてあるんですけれども、とにかく日米同盟というのは日本人が考えるよりははるかに強力で、日本の国だけでなくてアメリカにとっても極めて高い抑止力を持っている。

その結果、日本の周りで中国は極めて抑制的なんです。北朝鮮も実は、我々はミサイルばかりぶっ放して怖いって感じだけれども、実は抑制的なんです。そこのところはちゃんと見ておかなくてはいけない。あれを何かですね、いかにもミサイルを撃ち込

んできそうだというだけで考えるようじゃ、ガキなんですね。

あるいは領海侵犯してる、それで中国人の悪口言えば出ていくかといえば、出ていきっこないんですよ。領海侵犯されない法律・制度さえ整備していないのが、この〝大日本帝国〟ですから。

だからこれ世界に通用しなければ、外交も安全保障も危機管理も零点なんです。そこを意識しながらやっていかないとダメなのに、国内でしか通用しない議論をしたり強がりを言っている。その辺は私の仕事として、かなり厳しく関係先には言っています。

とにかく、日米同盟はアメリカから守ってもらうと、外務省すら思い込んできたっていうのが日本ですよ。ところがアメリカはそんなことは思っていない。ただ日本がアメリカにとって死活的に重要であるからこそ、日本でナショナリズムが頭をもたげて、日米同盟解消なんて方向になったら元も子もないから、すごく神経を使っている。

これは税金の使い道を通じて見れば明らかなんです。私が一九八四年にアメリカ政府の正式な許可を得て、北は三沢基地から南は嘉手納基地まで全部足を運んで、基地司令官の聞き取り調査をやり、国防総省の資料を出させ、最後のまとめは第七艦隊のグリーンフィッシュの上で第七艦隊司令官のグリップでまとめ、本にまとめたら、実態は日本人が考えているのと全然違う。

会社に例えるとですね、ドイツやイギリスや韓国は、支店から営業所の位置付けなんです。アメリカが東京本社だったら、日本は大阪本社の位置付けなんです。つまり日本の代わりをできる国はない。だからアメリカは日本が日米安保を切ることについて、神経をとがらせざるを得ないんです。

日本列島に何カ所の米軍基地があるかといえば、これは公表されているのに、私が国会の参考人の時に問いかけても、答えられた国会議員はゼロですよ。答えは八十四カ所です。もちろん米軍が使用している日米共同使用施設は、あと五十カ所ありますから、アメリカ側から見ると百三十四カ所が米軍基地です。それに支えられて、米軍はアフリカ南端の喜望峰までの範囲で行動している。それを日本の国防と重ねて、自衛隊と守っているわけです。

その一方、日本の自衛隊は自立できない構造に規制されている。これはドイツ軍もそうなんです。再軍備の時に、アメリカは賢いから、人間の体に例えると利き足を外科手術で切除した。国力がついた時に、敵になったらかなわんからです。

経済力中心に国力がついて筋骨隆々の体だというけど、義足をはかせてもらってないから、アメリカと肩を組まないと立っていられない。自分で走り回れないというのが日本とドイツなんですね。非対称的な関係なんです。

だからアメリカが攻撃された時に助けに行けない、肩身が狭いなんて言うのは一般論ですよ。自分の足で歩き回れる軍事力を持っている前提でないと、そういう議論は成り立たないのに、外務省も防衛省も、あるいは学者も、なんかアメリカを助けに行けるのに行かないのはまずいって感じに思い込んでいる。アメリカはそんなこと思ってないですよ。

非対称的だけれども、アメリカにとって死活的に重要で、他の国が代わることのできない、戦略的根拠地、パワープロジェクションプラットホームと言うんですが、そういう土地として日本列島が提供されている。

だからね、中国に対しても、オバマ政権の時も二回、習近平さんに対してアメリカは直接言ってんですよ。二〇一二年六月にはパネッタ国防長官が、習近平国家副主席に対して「尖閣諸島といえども〝アメリカの国益〟であることをお忘れなく」と言っている。

二〇一三年六月にはオバマ大統領が、国家主席になった習近平さんに言っています。中国はアメリカと日本が特別な関係にあることを理解すべきだ。ほかの同盟国とは違うんだから〝手ぇ出したら、いてまうぞ、おまえ〟ということを言っている。

新聞に報道されても日本人は、その言葉の意味が分からない、という話なんですね。アメリカにとって死活的に重要なんです。それを分かって中国も北朝鮮も行動している。だから安心していいという話じゃないんですよ。安全保障の世界には、安心していいという言葉はありませんから。やるべきことを

こっちがやらなくてはならないという話です。

ただね、とにかく東シナ海においても、相手が日米だから絶対にぶつからないようにしている。ぶつかった途端に中国に進出している国際資本が逃げちゃうのよ。天安門事件の時に僕は上海にいたけれども、あの時もみんな逃げ出して中国の未来は真っ暗とまで言って、民主化の連中も共産党の連中も嘆いていたくらい。

あの二の舞は避けたいんです。だから、ギリギリのところで動く。ただ国内の弱腰批判を封じないと、そこから突き上げられて共産党政権がガタガタになるから、弱腰でないという姿勢を見せ続けなきゃいけない。だからとにかく、日本のメディアが大騒ぎをするような動きをする。領海侵犯を繰り返す、レーダー照射をやる、異常接近をやる、防空識別圏を設定する。でもこれはニュースになることが目的です。日米とぶつからないようにやっている。

最終的には尖閣諸島問題を事実上の棚上げにして、戦争の火種をなくす方向に動いている。その抑制的な、中国の東シナ海における姿勢が、実際に南シナ海に及びつつある。

日本の議論が典型的なのはね、自分の国は自分で守らないといけないってことを言うでしょう。「日本会議」あたりの講演に行ってね、じゃあどうやって守るんだと聞くと、答えられた人はゼロだよ。口ばっかり。

日本の安全に関する選択肢は、二つしかないんです。同盟関係をとことん研究して活用しきるか、あるいは、武装中立をするか――。

日米同盟を活用すると世界最高レベルの安全が五兆一千億円程度の防衛費プラスアルファで実現している。費用対効果にすごく優れている。アメリカの属国のように見られるかどうかは、日本側がちゃんと胸張ってないからという問題なんです。

もう一つの選択肢――今と同じレベルの安全を〝自力で実現〟しようかと思うと、コストとリスクがめちゃくちゃかかるというのは誰が見ても分かるでしょう。防衛大学の武田（康裕）教授達が試算したのが妥当だけれども、年間の防衛費が二十三兆円から二十五兆円。そしてリスクはもっと大きい。日米同盟を解消した瞬間に、核の傘、核抑止力がなくなる。アメリカは日本列島を確保したいから敵にまわる。中国やロシアも出てくる。その中で核武装なんて悠長なことは言ってられない。何もできない。

それなのに「自分の国は自分で守んなきゃ」って。自分の国を自分で守るっていうのはね、日米同盟を骨の髄までしゃぶりつくすことが第一のステップなんです。それをちゃんと言えない日本人はダメです。

ですから中国はそういった認識でアメリカと呼吸を合わせながら国づくりをやっている。軍事的にはだいたいアメリカに比べて二十年遅れぐらいだということを自ら言うようになっているから侮りがたいんです。背伸びしなくなっているから。だからその辺はきちっとこちらがやるべきことをやって、差をつけ続けていくことが大事なの。

北朝鮮については、弾道ミサイルと核兵器を開発するというのは、実はこれはビジネスモデルにあたるものがあるということ。それはインドであり戦後のアメリカであり、そして中国なんです。

北朝鮮は今のところですね、インドの立場を手に入れようとしている。だから大陸間弾道ミサイルを手にするところまでいくし、核兵器の開発も弾頭に載せられるところまでいきます。しかし、どっかに打ち込むわけじゃない。どこかに打ち込んだら反撃を食らって消滅するという自覚はあります。

ただインドがですね、核拡散防止条約（ＮＰＴ）に入らずに、世界から非難されながら核と弾道ミサイルを開発した。そのインド、今はどうですか？ 他の三カ国、パキスタン、イスラエル、南アフリカも同時にやったけど、優等生といわれるのはインドだけでしょう。インドは核保有国だからけしからんという声はあまりない。

それどころか、同盟諸国のリーダーとして平和国家のイメージすら勝ち取っている。あるいは世界経済の牽引車としての期待も生まれている。これは北朝鮮から見たら、俺たちもちゃんとやればインドになれるというモデルじゃないですか。

そして核保有国として認められるということになると、北朝鮮の立場からいうと核抑止力が備わったということになるから、外国から攻め込まれないよ

うに大きな軍事力を維持してきたのを、削減することができる。

つまり負担を軽くして経済建設を進めようということなんです。北朝鮮のＧＤＰって、大きさでいうと茨城県くらいなんです。その二三％を軍事費につぎ込んでね、茨城県が北朝鮮軍を持っていると想像してくださいよ。えらいことですよ。

このモデルは実は、戦後のアイゼンハワー政権のアメリカなんです。アイゼンハワーが大統領に就任した一九五二年、ソ連と向き合っていて大きな軍事力を持っていなきゃいけない。やっぱり負担は大変なものだったんです。その時アイゼンハワーは何をやったか。バサーッと通常戦力を切る、その代わり当時百八十一発しかなかった小型の戦術核兵器、これを八年間で一万六千発近くにまでもっていった。核でバランスをとったわけです。

それをそっくり真似して経済建設を成功させたのが中国だった。つまり、インド、アメリカ、中国というモデルがある。それを目指してやっている。そして、北朝鮮・金正恩党委員長のもとでそれをやっているのは、欧米で研修を受けたテクノクラートです。

韓国の国家情報員なんかと僕ら、しょっちゅう作業があるんだけれども、年間約一千人が欧米に研修に出ています。一年間の期限付き。大部分がアメリカ。アメリカは正式にビザを出してる。韓国側に聞いたら、僕らが知っている大学でいうとニューヨーク州北部にあるシラキュース大学が有名だと言っていました。

シラキュースは二〇〇三年から北朝鮮の研修をやって一度も中断したことはない。経済政策とＩＴを中心に研修をしています。きわめて合理的な考え方のもとに、核と弾道ミサイルの開発をやってるというのは間違いないんです。イメージは悪いけれど、そこのところを見なきゃいけないということなんです。

だから北朝鮮がいつ撃ってくるだろうかと浮足立つのもだめだし、あるいは、撃ってこないから安心というのもだめなんです。こっちはこっちで国際水準の国家の安全を高めるべく、ちゃんとやっていくということなんです。

非国家主体の脅威　ＩＳ（イスラム国）、アルカイダ
――日本はターゲット上位を自覚すべき

非国家主体のほうはですね、各国が共通の脅威として認識しています。

例えばモンゴルのファイブヒルズ演習場というのがあるんですね。これは沖縄の海兵隊がモンゴルに持ってるんですよ。そこで多国間訓練というのをやります。「カーン・クエスト二〇一七」っていうのが今年です。

ここの場合二十七カ国から千人くらい出てます。ＰＫＯを中心とするオペレーションに関する訓練をやってる。我が陸上自衛隊も参加して十二年目くらいですが、実戦部隊を出したのは一昨年からですね。

宇都宮に駐屯してる中央即応連隊。皆さんの手元のレジュメについている写真、カラーだともっと面白いんだけど、これ向かって左が中国軍、向かって右が我が中央即応連隊です。南スーダンだって、どこだって、こういう格好になるわけなんです。理屈の上でいうと、国連のＰＫＯでは、国連の加盟国として日本の隣に北朝鮮軍が来る場合だってあるんですよ。

あるいはソマリア沖の海賊退治も、中国海軍も出てるし海上自衛隊も出てる。尖閣でちょっとゴタゴタするまでは、休みの日に海上自衛隊の護衛艦と中国の駆逐艦が近くに並んで、お互いの船に招待して「カンペイ（＝乾杯）」ってやってましたよ。そういう話なんです。つまり、国同士の戦が起きない努力をみんなやってる。一方で、共通の脅威をどうするかって話なんですね。

（レジュメにある）この陸上自衛隊の持っている銃を見てください。軍事オタクの皆さん、分かるでしょう？ これ「ＡＫ４７」。これはね、事情があるんですよ。日本の法律・制度がもうややこしくて、手続きが間に合わないっていうんで、当時の防衛部長がパッと判断してね、「丸腰で行く」って丸腰で行ってね、モンゴル軍のＡＫ４７を借りたんです。

それはそれでいいんですけど、ＡＫが使えるかどうかがＰＫＯの現場で生き延びられるかどうかの条件でもあるんです。日本の８９式小銃やアメリカのＭ４カービンはそれなりの精度があっていい銃だけれども、苛烈な環境の下で故障をしないという点では、アメリカの特殊部隊の指揮官が、「ベストライフルはＡＫ４７だ」って言うくらい、故障が少ないんです。部品点数は三点しかないしね。

だからとにかく、泥が詰まろうと埃が詰まろうと火薬のカスが詰まろうとも、作動不良になることはない。世界的には一億丁から二億丁生産されたっていうから、どこにでもある。横流しの新品を買おうと思ったら、九〇ドルだって言われたことありますよね。

それからこれ、（レジュメにある兵士の）構えを見てください。中国軍は右撃ちをしている。私もまあ、末端で三年あまりやって、射撃は得意だったけど右撃ちしかできません。ただもう今ＰＫＯの現場なんかに行ったら、左撃ちができないと死ぬだけなんです。右撃ちで撃てるような物陰探しているだけで撃たれる。

自衛隊も中央即応連隊は部隊ごとに左撃ちできるようになっています。あるいは習志野の駐屯地の中にいる特殊作戦群はもちろん撃てます。これはもう自衛隊全体に広げていこうということなんですね。

左撃ちができるようになると、射撃の腕が上がる。そういうことを一生懸命やりながら、中国とも協力しながらやっているというのが非国家主体との闘いなんです。

平和構築は国益だということ。物事を順序立てて考えれば明らかじゃないですか。世界の平和がなければ自国の安全も確かなものにならない。世界が平和で自国が安全であって初めて、世界を舞台とする日本経済の活動も可能となる。世界の平和と安全なくして、日本の繁栄はないんですから。そういう位置付けのもとに、国益の面から平和構築に出ていくということです。

ただカンボジアＰＫＯの後ですね、思考停止になってしまった。カンボジアＰＫＯの時、ＰＫＯ五原則を決める当事者として私もいたんです。当時は防衛庁の内局も全然動いていませんでした。それで陸幕から聞き取りをやって、何をやっていかなくてはいけないか全部整理して始まったんです。でもその二年後にはルワンダの虐殺が起きて、ＰＫＯ五原則なんて若葉マークの奴が通用しなくなっているのが明らかになった。でも全然動かさない。これはもう伊勢﨑（賢治）さんがね、本当に現場で苦労して苦労して苦労しての話なんです。

この話は後でお任せすることにするけど、そんな中で、いろんな課題を残したまま来ちゃって、こういう問題を正面からちゃんと議論して、整理しながら進んでこなかったことが、今回の「日報問題」に表れたって面もある。

私自身は直接特殊部隊で勤務したことはありませんけれども、これは伊藤（祐靖）さんにぜひいろいろ話して頂きたいんですが、二〇〇一年の九月一日の同時多発テロの状況を十月二十九日に陸上幕僚監部の防衛部でですね、これから後の陸上自衛隊をどうしていくかという研究会がスタートしたんです。

もちろん民間人は私だけです。私が第一回目のコーチです。当時、国家としての特殊部隊の位置付けを考える人間が陸幕の中にも九〇％くらいが考えていない人ばかり。特殊部隊っていうのは、警察、海上保安庁、あと海上自衛隊、陸上自衛隊、みんな同じようなものだと思っている。こんなことで使えるわけがない。

国家の問題の時に特殊部隊を投入するんです。だからアメリカの特殊部隊のオペレーションは大統領のところからやるじゃないですか。そういったものもないままに特殊部隊というものを整備しようとしても無理だし、もちろん数も少ないし装備も予算もない。そういったところの課題も、皆さんと一緒に考えていけたらいいなと思っています。

では、私の話はこの辺で終わります。（拍手）

「国際法と日本の安全保障」

伊勢﨑　賢治
（東京外国大学大学院総合国際学研究院教授）

ＰＫＯ的なものが、いわゆる国連安全保障理事会の決議をもってやられるものであるならば、これは国際貢献ではありません。国際貢献という言葉を使うのはやめてください。そんな軽々しいものではありません。これは集団安全保障であります。

現代の開戦法規というのは三つあります。まず、個別的自衛権の行使と集団的自衛権の行使。これは国連安全保障理事会が決議をしてアクションを起こすまでの間、束の間に許される固有の権利として位置付けられている。

そして一番大切なのが、国連決議で発令される集団安全保障であります。これが、いわゆる開戦、戦争をやる一番大切な口実なわけで、国際貢献みたいな簡単な言葉で表現してしまうと、それは現場の感覚ではありません。

つまり多国籍部隊がそれぞれのリミテーション、国内法を考えながら参集して国外で活動するわけであります。撃ってくる敵というのは、日本だからこう撃つとかアメリカ兵だからこう撃つって考えませんよ。そこを支配する原理というのは、すべて国際法なのであります。開戦法規と交戦法規、この二つを常に意識しながら自らの行動原理につなげる。

武器を持って行くわけですから、人を殺すわけです。それを国内でやるんじゃなくて、国外でやるわけです。それが東ティモールの時には僕の身に起こってしまった。死体検分の時に、目の前に転がっている死体、どう見ても現地人のお兄ちゃんですよ。

これは我々が「殺人」を起こしたのか、それとも正当で公正な殺害なのか、本当にそう言い切れるのか――この感覚というのは、どの死体に対しても変わんないんです。目の前に転がっているのはどれも同じ死体なんですから。そういう世界なんです。

きょうはそういうお話をします。

国際法の観点から考える

国際法がすべてなわけです。殺人を起こしたんだけれども殺人じゃないという、自分に思い込ませるためにも大切なわけであります。

まずは「安倍加憲」の話からします。安倍さんが急に日本国憲法第九条の一項と二項をそのままにしておいて、三項を付け加えてそこに自衛隊という名称を明記すると言っている。みんな驚いたわけですね。僕はエイプリルフールかと思いました。

実は三週間前、外国特派員協会で英語で講演を頼まれたんです。なぜ頼まれたかというと、日本でみんなが大騒ぎしているので、英語で報道したいんだけど何を言ってんのか分からない。そこでちょっと説明してほしいというわけです。

ご存じのように日本国憲法は英語原文がございます。ＧＨＱが作った。それで世界は理解しているんです。この英語原文というのが内閣府のホームページで見られます。これはＧＨＱの時代から変わっておりません。

これを英語が少しできる方は日本語を全く気にせずに、特に九条の二項を英語で読んでください。そうすると日本語原文との違いが分かるはずです。かなり違うんです。

「land, sea, and air forces, as well as other war potential」――これを日本語では、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しないと訳している。「war potential」ですよ。陸海空の軍プラスすべての戦争に使う可能性のある潜在能力を持たないということです。竹槍も含みます。そういうふうに訳していないでしょ、日本語では。だからGHQは根こそぎ戦力を取り除きたかったんですね。英語で読むとこれは明確に占領軍のいる時代に作られた憲法だってことがよく分かります。

問題は「forces」なんです。「land, sea, and air forces」――これが戦力にあたるんですけれども、これに安倍さんが三項を加えて、「self defense forces」＝自衛隊を加えちゃったらどうなるか。「forces」が二回出てくるわけなんです。二項で持たないと言ってるのに、三項で持つと言ってるんです。英語では「隊」であろうが「軍」であろうが「forces」なんです。いや「self defense forces」だから違うんだ、二項の場合は軍の「forces」だろ、三項の場合は「self defense forces」つまり自衛隊だから、これは自衛のための「forces」だから違うんだって思うかもしれませんが、そんなのは日本国内だけの論理です。

つまり国連憲章ができてから特に、それ以前からもそうですけど、いわゆる「self defense」以外の戦力は国家は持てません。個別的自衛権、集団的自衛権、二つの自衛権プラス集団安全保障以外の目的の「forces」は持てないんです。ということは「self defense forces」ってのは、普通の軍を意味するんです。国際法ではそういう考え方をします。

パリ不戦条約の時から自衛以外の戦争はすでに違法化されています。特に国連ができてから厳しく制限されています。これは九条ができる前からです。国連憲章では原則としてすべての威嚇行為、国際関係においてそれを解決するために、武器の使用は厳しく禁止されています。

しかし、例外があるわけなんですね。それが自衛権であります。それと集団安全保障であります。有名な国連憲章五十一条は、自衛権について定義されています。そして、国際連合加盟国に対して武力攻撃が発生した場合は、まず攻撃を受けなければ自衛の要件は生まれません。いつも国連憲章を破るか破らないかのギリギリのところでやるのは、アメリカ合衆国です。そのアメリカ合衆国でさえ、これをすごく気にしています。

戦争とは何か。自衛戦争です。自衛戦が戦争なんです。そしてそれは二つの概念で規制されます。まずは開戦法規―戦う口実を厳しく制限し、それが始まったら、次は交戦法規―やっちゃいけないこと、使っちゃいけない武器を、人間はずっと積み重ねているんです。

国連ができる前は戦時国際法と言いました。今はこれを国際人道法と言います。つまり非人道的なものとは何かということ、非人道的な武器は何かということを規定しているわけです。これは今でも積み重ねています。対人地雷条約、クラスター爆弾など、聞いたことあるでしょ。

この口実を悪用されることがありますけれども、悪用でもこれで説明しなければならないんです。どんな状態の時もです。交戦法規はルールです。このルールに反することをやろうとすると、それはすなわち戦争犯罪です。「War crime」になります。

何が戦争犯罪かを決めるのが国際法―今の国際人道法です。そしてその処罰をするのは、国家の責任なんです。まだ地球政府はできていません。国連は地球政府になっていません。何が戦争犯罪かを決めるだけで精一杯なんです。それを実際に起こしてしまった時に、それに対処するのは各国の責務なんです。そして、それぞれの国にある軍法、軍法会議、軍事法廷がそれを行うわけです。

これは通常の殺人とは全然違います。殺人というのはそれをやった個人の責任です。個人の意思です。戦争犯罪というのは国家の犯罪です。国家の指揮命令系統が責を負います。これが普通の刑法と違うところなんです。この法体系を持つのが国家の義務なんです。日本はありますか？ ないんです。

国連とは何か

国連とは何でしょうか？ 侵略者を二度と許さない戦勝国・五大国の世界統治システムです。「United Nations」―連合国ですから。

その性格が一番よく表れているのが、国連憲章第八章であります。敵国条項です。よく読んでください。第八章というのはミニ国連を作ることを奨励しているわけです。つまり国連安全保障理事会が、なんでも地球で起こる問題を丸投げされても困るから、まずご近所でミニ国連を作って対処してくださいと、これが国連憲章第八章の精神であります。

しかし、敵が現れた時にミニ国連が対処してほしいんですけど、ミニ国連が何かする時には国連安全保障理事会の五大国に逐一許可をとってください、これが軍事同盟にあたるわけです。

でも例外があるわけです。そのミニ国連に襲いかかる敵が旧敵国だったら許可なしにボコボコにしていいよっていうのがこれ、敵国条項です。もちろんこれはアメリカが削除するために動議をかけたなんて事実はありません。我々日本は〝保護観察〟の身なんです。

国際連合を基調とする国際法上、日本ほど武力の行使に気を付けなくてはならない国はないんです。ここを考えましょう。だから敵地攻撃なんて勇ましいことは絶対に言わないでください。自衛権において一番誤解されやすいのが我々なんです。

日本が侵略戦争をしないのは、九条のおかげではありません。なぜかというと国際法の世界では、権利としての戦争、交戦権は九条ができた時点ですでに概念上否定されております。交戦権、すなわち戦争する権利なんて存在しなかったんです。

だからそれは、今でもそうですから、否定したって何の効力もない。ましてや我々は敵国条項で縛られているんです。だから今まで我々が侵略戦争を、権利としての戦争をしていないのは、九条のおかげではありません。ここに九条の信奉者がおられましたら、まずその誤解を解いてください。

同時に、中国は侵略しません。わかります？ これは右翼に対して言いたいんですけど、中国が我々の本土に武力攻撃をする時というのは、中国にとって自衛の要件が成り立つ時です。ましてや中国は国連の機関です。それも親玉です。我々日本は平民以下なんです。

領土係争で尖閣ぐらいはとられます、あれは。もし本土の攻撃を中国がやるとしたら、侵略ではありません。中国は侵略しません。何らかの理由で我々の行動があちらにとって自衛権を行使できる要件を作ってしまった時です。それ以外はないんです。

ＰＫＯについて

ＰＫＯの話をします。これは内戦です。内戦とは何か？ 一つの国の中で、政府とそれに反対する反乱軍とが戦う、だからこれは国際紛争、戦争ではないという考え方なんですね。でもどうでしょうか。今内戦が起きているアフリカ、国境をだれが決めたんですか？ 白人が勝手に引いたものです。民族がまたいでいる。それを反政府ゲリラが行き来をする。これは国際紛争なんですね。

ＰＫＯというのは国連憲章に書かれておりません。だって国連は内政不干渉の原則です。内戦はあくまで内政ですから。でも戦争と同じような人的被害が出ると、世界の統治者として五大国が何とかしなけりゃならない。内政不干渉の原則と、この被害を何とかしなけりゃならないという葛藤から生まれたのがＰＫＯでございます。

先ほど小川先生がおっしゃった一九九二年にできた日本のＰＫＯ派遣五原則、ちょっと読み上げますと、紛争当事者間で停戦合意が成立している。政府に反対する反乱軍も含む紛争当事者の同意、つまりＰＫＯが入るぞ、自衛隊が入るぞということにみんなが同意している。あくまでも自衛隊、ＰＫＯというのは中立的立場である。以上の条件が成立しない場合には撤収が可能。昔はそれが満たされない時は、自衛隊に限らず国連全体が撤収しちゃったんです。自衛隊に限らず国連全体が。

そして、あの「ルワンダ虐殺」が起きてしまった

んですね。百日間で百万人が死んじゃったんです。これがトラウマになったんです。そこから生まれたのが「保護する責任」。もし同じようなことが起きたら絶対に放っとかない。住民をいじめているのが国家であっても、国連としてそれをやめさせる義務があるという考え方ができたんです。

でもこれは、もろに内政不干渉の原則とバッティングします。だからジレンマがずっと続いたんです。どういう法的な解釈をして、介入するなら介入して、どういうけじめをつけたらいいのかってことを、国連はずっと悩んでいたんです。

それでやっと一九九九年八月十二日、国連史上、本当に画期的な決断をします。当時国連事務総長はコフィー・アナンでした。この時から国連は正式に変わります。

国連部隊ＰＫＯに対して、国際人道法を遵守するようお触れが出ました。国際人道法というのは交戦法規です。中立であるはずの国連、交戦法規の概念から除外されていると考えられる国連が、紛争の当事国と戦えということなんです。

国連多国籍軍の行動原理は簡単です。簡単且つ深淵、重要です。南スーダンを例にすると、国際人道法を軸に、国連が一括して南スーダン政府と地位協定を結びます。地位協定の中身というのは、日米地位協定と同じです。

もし駐屯する兵力が事件を起こしてしまったら、裁判権の問題をどうするかということです。国連地位協定の場合は南スーダン政府には裁判権はありません。では国際人道法違反を国連部隊が起こしてしまった場合どうするのかというと、各派兵国の国内法廷で裁判を行うということです。

そういうものが日本はありますか？ 軍事犯罪を裁く国内法廷はないですよ。なぜなら、我々は戦闘しないからです。自衛隊は、あくまでも戦闘が起きても措置ができない。憲法があるからです。我々は、戦争犯罪に対処する国内法を完備していない、世界で唯一の国であります。自衛隊は、国家の命令で起こす過失・国際人道法違反があった場合、これを審議する法がありません。

では、起きたらどうするのか。日本の刑法には国外犯規定というのがあります。日本人が海外で起こした過失は裁けないんです。故意犯だけしか裁けない。だから日本が持っている法体系というのは戦争犯罪を起こしちゃった場合、これを自衛隊個人に故意犯として押し付ける方法です。これって一体、どういうことですか。こうやって我々は自衛隊をＰＫＯの現場にずっと送り続けてきたんですよ。

地位協定について

国連ＰＫＯにおいて、今まで自衛隊は参加してきました。日本は地位協定に入ってたんです。それも日米地位協定のように我々が被害者の立場ではなくて、加害国としてです。

地位協定というのはなんでしょう？ 国連地位協定に限らず、日米地位協定に限らず、一言でいいますと、国家がその戦力を異国に駐留させる時、その戦力が異国の法律から訴追を免除される特権を定めるということです。

なぜこんなことが可能なんでしょう。それは戦力を送る国家がその異国に代わって裁くからなんです。その責任がない国は、地位協定に入っちゃいけないんです。日本はどうでしょうか？ これまでずっと送り出してきましたよね。

じゃあ南スーダン政府は文句を言わないんでしょうか？ 言いません。なぜなら知らないから。説明してないですもん。

今、ジブチに陸自の基地があります。日ジブチ協定というのを結んであります。これ、説明してませんよ、外務省は。だってまさか軍法も持たないのに、軍事組織を外に出す国があろうとは誰も思わないわけです。

僕は何回も星条旗新聞から取材を受けています。リポーターが「あ…」と目が点になりました。そんな国家があるとは、みんな想像だにしないんです。

地位協定を結ぶ状況というのは色々あります。僕なりに考えると、三つの状況に分けられます。①戦時、戦争をやってる時。②準戦時、これは今でいうとアフガニスタンみたいなもんですかね。ちゃんと

主権国家があるんだけれども米軍もちょっといる。でも戦っている本体はアフガン国軍。もしくは朝鮮半島、これは休戦状態。そして、もう一つ。一番地位協定が多い状況というのは、③平時です。平和な時です。日本は平和でしょ？ だけど米軍がいる。ドイツ、イタリア、フィリピン、すべて米軍がいます。いずれも戦争状態ではありません。

平時の地位協定、これを比べると、とんでもないことが分かります。まず、世界の地位協定の中で最も従属的なのが日米地位協定です。平時の地位協定ではすべての国において、いわゆる互恵性という概念が確保されています。

つまり逆があり得るんです。外交の権限、つまりフィリピン軍が米軍に駐留した時に、自動車事故でアメリカ人を米国内で殺す、これが公務内であればその事件に対してアメリカに裁判権はありません。同じ権利を認め合う。これを同盟といいます。

大切なのは、同盟であれば地位協定上の権利をお互いに認め合うこと。だから法的には対等なんです。これを世界では同盟といいます。

もちろんＮＡＴＯの一員であるイタリア、ドイツ、まさに互恵性であります。ＮＡＴＯ地位協定をご覧になってください。これがない平時の地位協定は我々日本だけです。なんでこれで同盟なんていえるんですか？ ちゃんちゃらおかしいです。

そして、変わらないのは日米地位協定だけです。総論として日米地位協定は、六十年間変わっておりません。そして日本みたいに全土基地方式なんていうのはあり得ません。

軍事の主権のない国と、どうやって領土解決、紛争解決なんてできるんですか。プーチンが正しいですよ。軍事的な主権のない日本と、どうやって領土問題を解決できるんですか？ できるわけない。

地位協定の安定を求めているのはアメリカ軍です。だから、アメリカ軍が起こした事件を契機に反米感情が高まることを、アメリカは一番恐れているんです。反米感情が高まって、フィリピンでは一回出て行けと言われました。イラクでもそうです。ですからアメリカは譲歩するんです。

地位協定というのは、「運用」じゃダメなんです

よ。運用だと密室で行われちゃうから。「改定」が重要なんです。改定の場合、改定文書が国会で審議され、国民の目に触れるわけですね。それでガス抜きを行う。そのための改定なんです。だから運用じゃなく改定にしなきゃいけないというふうに公式文書に書いてあります。アメリカの国務省のホームページで見れますよ。

アメリカの地位協定いくつあるかご存じですか？ 百十五以上あります。この運用が今までめちゃくちゃだったんで、これを統一しようとして、やっと今から二年前アメリカの国務省が動いたんです。そして正式文書の中で書いたんです。改定をしたがっているのはアメリカなんです。なぜなら、安定を求めるからです。

日本国憲法第九条二項について

誤射誤爆に対する戦争犯罪を審議できない打撃力というのは単なるハリボテです。我々は法治国家なんです。北朝鮮でさえ持ってますよ。撃った後に審議する。どっちが無法国家ですか？ その意味では、我々は世界一の無法国家です。

軍事を法治できない日本は、安全保障にジレンマを抱えている。だって撃てないんだから。だからハリボテを買い続けるしかない。高い兵器を。だから九条の国が、通常戦力で世界で五番目か六番目でしょ。

そしてちょっと話は変わりますけれども、これをやるためには九条二項をどうにかしなければなりません。九条の二項が根本的なネックです。加憲ですか？ そんなのダメです。九条二項を完全に削除する。だって交戦権という言葉は、九条ができた時点で国際法上、死語なんですから。それをいつまで置いておくんですか？ 今でもずっと死語なわけですよ。それを禁止したって、国家の軍事力なんて統制できるわけないでしょ。

なぜそういう欠陥のある条文を置いておくんですか？ 九条二項をどうにかしましょう。加憲じゃダメです。以上です。（拍手）

「自衛隊の特殊部隊とは」

伊藤　祐靖
（元海上自衛官）

皆さん、こんにちは。伊藤と申します。宜しくお願いします。

「激動する世界情勢と我が国の安全保障・国際貢献のこれから」という題目で開かれておりますが、パネリスト三名のうち、わたくしだけが肩書がありません。二名の方は教授なんですね。わたくしが何でここにいるのか。今お二方からお話し頂いた、国際法とか安全保障とかのご説明をするためにいるわけではなく、わたくしは現職の時も辞めてからも、今でも「特殊作戦」の世界で生きておりますので、そこで見たこと聞いたことを皆さんにお伝えするためにいるんだろうと思っています。

もうちょっとわたくしの自己紹介をいたしますとですね、わたくしは育ったのは茨城県で、そこから日体大に特待生でいっております。特待生というのはインチキ入学ですから（笑）、受験勉強して入ったわけではありません。スポーツの記録だけで入っています。

そこを四年間で出て海上自衛隊に入っています。海上自衛隊には二十年間おりました。前半は戦闘艦乗りとしておりまして、後半は特殊部隊を作るところから関わって、足掛け八年間在職しておりました。

四十二歳の時に艦艇部隊への転勤の内示を受けまして、それを拒否して退職、それでフィリピンへ、今話題になっておりますがミンダナオ島に行きました。そこで三年くらい住んでいました。

ここからのお話をさせて頂こうと思っているんですが、ミンダナオ島というのは、非常に治安が悪いです。何で悪いのかというと、悪い奴がいっぱいいるからというわけではなくて、イスラム教とキリスト教のちょうど境目といいますか、二分しております。

私が島に行って最初によく分からなくなったのは、宗教って何だろうということでした。自衛隊員の時は、イスラム教というのは、けしからん奴らだと思っていたんです。イスラム教はろくな奴がいなくて、あいつらのせいで今揉めているんだという、何の学も知識もない私はそう誤解をしておりました。

向こうへ行って宗教というのが本当にわからないので、教会にも行きましたし、イスラム教のムスクにも入ってみました。入信はしていませんけれども、関わってみました。そして、少なからず理解してくるとですね、イスラムの奴の方が非常に真面目だなという気がしました。だいぶ生活を律していますので、イメージと全然違うなと思いました。

ミンダナオ島のイスラム勢力の中に私はよく行っていましたので、その中で話をしていると、彼らに今のこの状況、イスラム教とキリスト教関連の広範囲にわたる揉め事を、どうなるんだろうねと話を聞くとですね、「勿体ないんだよね、日本が絡んでくれりゃあ解決する気がするんだけどさ」というのを、何人かに聞きました。

これはミンダナオ島に限らず、私の知り合いで中東にいる奴も同じことを言っています。彼らが日本人の私に最初に言うのは、びっくりしますけれども、日露戦争の話をします。日露戦争のこと

をおそらく日本人よりよく知ってる。そして日本について「日露戦争に勝って、アメリカを三年半苦しめて、原爆二発落とされて、その後経済復興した国。その日本だったら信用ができる」という言い方をします。

なんでそんなに高い評価なのって聞くと、大きな国に歯向かったということ、勝ちはしなかったけど苦しめたこと、それから経済復興したこと。そして、PKOとは言いませんでしたけれど、平和活動といいながら非常に信用できない奴らがいて、本当に平和を願っているのか、そこにある何かをかっさらおうとしているのか、それが信用できないんだけど、日本だったら信用できる、ということを何回も聞きました。

これが真実かどうかというのは判断する知識も勉強もしておりませんが、非常に広い範囲、ミンダナオ島から中東までのイスラム圏の十人弱から直接聞きましたので、ぜひとも知っておいて頂きたいというか、知る価値のある話だと思います。

じゃあ現実的にどうするんだというと、今お二人の話を聞くと、当然のことながら、そんな簡単な話ではなくて、国内の問題、国際的な問題いろいろとあるわけですね。

特殊部隊を〝使う側〟の課題

私は特殊戦の世界に今も生きておりますので、どういうものの考え方で特殊部隊がいるのか、ちょっと国の名前は言えない部分もありますが、いろんな国の特殊部隊員とも絡んでおりますし、他国の特殊部隊というのがどういう人生観なのか、自衛官を二十年やっていたので、自衛官というのはどういうものの考え方なのか、もちろん一色ではありませんけれども、どういうタイプが多いのかというようなお話はできると思います。

私は辞めて十年たちますので、日本の特殊部隊とは接触もしておりませんので、現状の問題点は〝知らないことに〟なっています。

知らないことになってはいますが、私から見た非常に大きな問題点は、使う側が特殊部隊の使い方を分かっていないのではないかなと思います。

自衛隊のジレンマというのは、ミッションが明確になっていない、任務として明確に与えられていないものについて訓練はできません。「任務でないものを、なんでやってんの?」—それで終わってしまいます。

ただ現実として、自衛隊という特性上、任務として明確になっていないことが起こるんです。

一九九九年、能登半島事案という事件（能登半島沖不審船事件）が起こりました。北朝鮮の工作船が日本人を拉致している真っ最中の可能性が極めて高かったんですが、これを海上警備行動を発令して保安庁、海上自衛隊で追っかけましたが、結果的に逃げ切られたという事件です。この事件をきっかけに、当時防衛庁ですね、防衛庁内に特殊部隊を作ることに決定し、それに私は関わりました。

能登半島事案の時に、私はイージス艦「みょうこう」の航海長としてその場にいました。この時に何が起きたのかというとですね、立入検査隊員の派遣命令が出たんです。これは、民間の船に乗り込んでいって、積み荷の検査をするというものです。その命令が出たんですが、しかし必要な物資も入っていなければ、訓練も一回もしていない。

具体的にいいますと、いわゆる下士官というものはですね、ライフル、ロングガンは訓練するんです。大した量は撃ちません。年間百発くらいです。しかし拳銃というのは基本的にはオフィサー、幹部が持つことになっているので、彼らは触ったこともない人が非常に多いんです。

それなのに、この時は立ち入り検査の派遣命令が出ていますから、拳銃を触ったこともない人間に、その場で拳銃の触り方を教え、弾の詰め方を教え、一発も撃ったことのない人間が、北朝鮮の工作母船に乗り移っていって、北朝鮮の高度な軍事訓練を受けた工作員と銃撃戦の上、日本人を救出してこいということなんです。

要は、特殊部隊の使い方にも直結しますけれど

も、特に特殊部隊は政府としてお手上げの時、どうしていいか分からない時、最悪にして最後の手段かもしれないという段階に出るのです。私はそれを現実に目の前で見ていました。

特殊部隊員というのはいつ何が起こるか分からない。紙に書いてあるような任務ではありませんので、国際情勢をよく見て、何が来るのかを予想して準備しておかなくてはならないんです。

しかしそれは超法規的といいますか、やっていいことにはなっていない、ということなんですね。

しかしですね、これはできるんですよ。例えば野球の選手にヒットエンドランの練習をするなといったって、キャッチボールとベースランニングとバッティングの練習をしておけばいいだけなんです。通しの練習はできませんが、分割すればできる話なんで、いくらでも現場はできます。

ですから、話を戻しますと、特殊部隊の使い方が分かっていないんではないかなというのは、最悪にして最後の手段として使う組織であることをよく認識して、そういう枠の中で動かす覚悟、気合、気力をシビリアンが持っていないのではないかということです。自衛官ではなくてシビリアンがそれを持たなければいけない。使うか使わないかは、自衛官が考えることではありませんから、シビリアンがそれを持つことが非常に大切であろうと思います。

能登半島事案の時、北朝鮮が日本人を拉致している可能性が極めて高かったという話をしましたが、私の知っている限り、防衛省では拉致問題には一切関わる気がないように思います。ただ唯一私のいた部隊には拉致を阻止する、拉致されている最中に取り戻すという使い方はあると思いますけれども、北朝鮮に行って連れて帰ってくるということは、防衛省のミッションの一つだとは言っていないと思います。

日本の特殊部隊の現状

さて、特殊部隊というのは一体何なのかということです。結構イメージでお話しされることが多いと思うんですが、まず、特殊部隊にはいくつかの種類があります。警察における特殊部隊（SST）と海上保安庁における特殊部隊（SAT）、それらと軍の特殊部隊とでは性格が全く違うんです。

警察、海上保安庁というのは、説得をすることによって相手の投降を促すとか、犯罪を未然に防ぐとか、犯罪者を捕まえるという発想が組織の中にあります。現場の隊員自体は軍隊的な考え方をしておりますけれども、組織としては、やはりそういうものを旨としているんです。

じゃあ技術的にどうなのかというとですね、警察、保安庁の技術は、ダイレクトアクションというんですけれど、扉を壊して中に入って犯人だけを処置をして連れてくるというものです。これが警察、保安庁の技術。

これが自衛隊なり、軍になるとですね、移動というものが入ってきます。移動してその場に潜伏をして、仕事をしてその場を離脱していく。だからこそパラシュートはできなければ話にならないし、ジャングル行動、レンジャーもできなきゃならないし、現地で食料品や水を調達して二週間くらい生きるというのができないと話にならないし、水の中に潜ることもやるし、狙撃の単位も全然違います。警察の狙撃というのは二〇〇メートルくらいですけれど、我々の狙撃ってのは三倍も四倍も遠いですから。

ですから、警察や保安庁は、いわばインフラが整っているところで仕事をする。そしてインフラのないところを移動して仕事をするのが軍の特殊部隊だと考えるとイメージが掴みやすいと思います。

私は陸海空で教官をした経験があります。おそらく私一人だと思うんですが、それは私が偉いとかじゃなくて、私が銃の教官資格を持っているか

らだと思います。

陸海空の三つを見て、共通した悪い点ばかりを指摘するんですが、ただ、皆さんが想像しているより遥かに彼らは本気だし、これほどあの組織の悪口を言っている私でさえ、現場の若者を見たら胸が詰まるくらい、抱きしめてやりたいくらい真剣にやっている人間が多いです。

しかしながら階級が上がっていけばいくほど、残念ながら私心がどんどん出てくる。なんでなんだろうと思うんですけれども。

私のいた部隊は特殊部隊ですから、エリミネート教育――つまりどんどん削っていく、選び抜いていくわけです。

日本人を拉致している真っ最中の工作母船に乗り移って、日本人を取り戻してくるというのがメインミッションなんで、軍事的には極めて厳しい。はっきりいえばあり得ない、無理に近い作戦でした。

これに従事する人間をどうやって選んだかというと、能力では選ばなかったです。人生観と死生観だけで選びました。肉体的、メンタル的、技術的にすごい人間を集めたかというとそんなことではないんです。

それは後からできますから。体は鍛えりゃあ強くなってきますし、技術ってのは教えて育てればいくらでもうまくなりますから。非常に能力の高い人間を集めたわけじゃない。でも、手前味噌ですが非常にいい部隊ができた。

どういうことかというとですね、優秀ではないごく一般的な技量、知能、体の自衛官を集めたにもかかわらず、いい部隊ができた。私はこれは日本の縮図だと思っているんです。

じゃあ何に気を付けたのかというと、ピラミッド型にはしなかったことです。どちらかというとフラット型です。なぜかというとですね、他国の軍という組織は、能力的に上と下の差が信じられないくらいあります。靴ひもを結べない奴と天才的に頭のいい奴が組み合わさっている。将校クラスには非常に頭がいい連中が集まって、その下はその国の最低レベルが来ますから。

しかしながら、日本はあまり開きがない。ボトムのレベルが、他の国と比べると信じがたいくらい高いんです。だからピラミッド型の組織は向いていないんです。他国がうらやむくらい、他国では決して真似ができないくらいフラットな組織の成功例として、日本独自の組織モデルを広げていきたいなあと思っています。

特殊部隊というと非常にすごい人間、すごいレベルを持っているとお思いでしょうが、他国の特殊部隊は、あんまり舐めたことをいうと申し訳ないんですが、日本のレンジャー程度です。それくらい日本人のレベルが、ボトムのレベルが高い。他国においては選抜されて特別な教育を受けている人間が、日本でちょっと選んだくらいかなというようなレベル。ボトムのレベルの差があるというのは、あくまで私の経験、肌感覚ですが、こういった特性を最大限に生かす、日本にしかできない組織論があるんではないかなあと、今、感じています。（拍手）

（了）

シンポジウム終了後、財団の応接室にて。（右から、伊藤氏、小川氏、桜林氏、伊勢崎氏）

連載 08

『尾崎行雄伝』

（沢田謙著、一九六一年）

第八章　大同団結

明治十八年十二月に官制が加わり、日本にもはじめて、今と同じような内閣が組織されることになった。初代の内閣総理大臣を買って出たのは伊藤博文だったが、この内閣が真っ先にぶつかったのは、条約改正問題であった。

はじめ外相の井上馨は、大変な鼻息で、我輩の声望と力量をもってすれば、この維新以来の難問題も、またたく内に解決してみせるという意気込みで、さっそく談判にかかったのだが、さてやってみると、日本をばかにしきっている外国の公使たちは、てんで相手にしてくれない。

そこで井上は考えた。

「これというのも、日本の制度文物や民情風俗が、あまりにも西洋と違いすぎているからだ。これからはすべて西洋のまねをして、何もかも欧米諸国と同じにしてしまおう。そうでもしなければ、とても条約を改正して、列国と対等の地位にすすむことはできない」

そしてついに、あの朝野をあげておどり狂う「鹿鳴館時代」を現出したのである。その狂態を見ると、尾崎はさっそく筆をとって、「ダンスといえば、元来が舶来もので、これを習うのは、紳士淑女の職務のように思っているが、つまりは西洋の盆踊りにすぎぬ。一方では、日本の盆踊りを、卑俗低級だといって禁じながら、自ら気違いじみた西洋の盆踊りに興ずるとは、何ごとであるか」

新聞にこう書きたてて、大いに叩いたのだが、何しろダンスさえすれば、条約改正ができるように思って、あの謹厳そのものの山県有朋までが、妙ななりをして、踊り狂ったのだから、あきれて口もきけない光景であった。

さすがにそれがあまりひどくなると、猛烈な反対の世論がわき起こった。それに井上の条約改正案というのが、すこぶる国辱的なものだったので、政府内にも反対の声が起こり、農相の谷干城（たにたてき）に至っては憤慨のあまり、痛烈な意見書をのこして、内閣を去ったほどであった。

ところが、こうして条約改正反対の世論は、すさまじい勢いで起こっているのに、この世論を指導するべき政治勢力は一つもなかった。改進党のごとき、尾崎等がやっと孤塁を守って、苦闘をつづけているありさまで、政党は藩閥の企んだとおり、まるで火の消えたようになっていた。

「これじゃあ駄目だ、誰かしっかりした中心人物を立てて、政府打倒の戦線を統一しなければ、とうてい成功の見込みがない」と考えた尾崎が、いろいろと考えぬいたあげく、白羽の矢を当てたのは、後藤象二郎であった。このとき、後藤を担ぎ出したことが、政党の気力を盛り返す機縁となったのである。

後藤象二郎は天保九年（一八三八年）、高知で百五十石取り馬廻り格の家に生まれた。板垣退助とは互いに「イノス」「ヤス」と呼び合い、腕白小僧の大将だったことはすでに述べた。十歳の時、父が江戸の藩邸で病死し、母も実家に帰ったので、後藤はたちまち天涯の孤児となった。この不運な英才に目をかけて薫陶したのが、叔母の夫にあたる土佐藩士の吉田東洋だった。

嘉永五年（一八五二年）、アメリカに漂流していたジョン万次郎こと中浜万次郎が十二ぶりに土佐にもどって来た。吉田東洋が万次郎を呼んで、いろいろ海外の事情

沼間守一（ぬま・もりかず）
改進党の大幹部。酒癖の悪さが難だったが、当たる岩を粉砕せずにはやまぬ戦闘力をもっていた。

を聞いている時、後藤はそばで、じっと耳を傾けていたが、中浜が持ち帰った万国地図をもらって家に戻ると、数日家にこもって、じっとその地図をにらんでいた。

「見ろ、この豆粒のような小さな島々を！　これが日本なのだ。男子生まれて大地を踏むからは、その足大陸を踏破せずして、また天下を談ずるに足りない」――これが十四歳の時である。

十六歳にして、吉田東洋にしたがい、はじめて江戸に出た後藤は、東洋が藩の政権を握ると、年わずか十九歳で藩の農政を司る郡奉行に抜擢され、それから普請奉行を経て、御近習目附に転じ、藩主の左右に侍する身となった。

文久二年（一八六二年）に、吉田東洋が、武市半平太一派に暗殺されたことは、後藤にとって一大痛棒であった。しかし二年後には藩情がまた一変して、東洋の残党がふたたび政権を握った。後藤が「開国策」一篇を藩に提出したのは、この時である。藩主の山内容堂はその才を喜んで、彼を大監察に任じた。そしてさらに参政に抜擢されるにおよび、後藤はついに藩政の中心人物になったのである。

開成館をもうけ、西洋人を招いて英仏蘭語を教えさせたり、病院を五台山に建てて、蘭方医に患者を治療させたり、藩札を発行して財政を整理したり、国産の樟脳を長崎に送って、汽船を買い入れたり、岩崎弥太郎を長崎留守居役として海外貿易をやらせたり、盛んに進取的政策をとった、まさに後藤得意の時代であった。

こうして後藤は吉田東洋の関係から、佐幕開国派と見られていたが、彼は早くも、幕府の命運がすでに窮まり、単なる公武合体論では、とても時局を乗りきれないことを見抜いていた。

ある晩長崎で、坂本龍馬と胸襟をひらいた時、坂本はいち早く彼の人物を見抜いて、「後藤は近ごろの人物にて、土佐国もこのごろは大いに面白き勢い、当年七、八月ごろには、またこれが、薩長土になりはすまいかと楽しむ」と、友にあてた手紙に書いている。

こうして土佐藩内では、後藤を首領とする文治派と、板垣の率いた武断派とが、複雑怪奇な渦をまくようになった。

容堂の意見書をふところにした後藤が、二条城で、将軍徳川慶喜と膝詰め談判をやり、得意の快弁をふるって、ついに大政奉還に踏み切らせたのは、この時である。これぞ後藤のうった一世一代の大芝居で、これにより彼は

一躍、時代の大立者となったのである。

こうして維新戦争の際は、武断派の板垣が、錦旗をひるがえして、朝敵征伐に向かいつつある時、文治派の後藤は、新政府に入って、外国事務掛を仰せつけられた。そして維新後、板垣が土佐藩に呼び戻されて、藩政に携わっているときも、後藤はずっと中央政府にとどまり、工部卿から左院議長を経て、明治六年（一八七三年）五月参議にのぼった。が、征韓論の破裂のため野に下ったことは、すでにのべた通りである。

その後、板垣は自由民権運動の一本槍で進んだが、後藤はだいぶ紆余曲折した道をたどった。政治運動をやるには、どうしても金がいるというので、新橋あたりに蓬莱社という商社をつくって、外国相手の商売をはじめたり、長崎県の高島炭鉱を五十万円で払下げをうけて、その経営に乗りだしたりしたが、いずれも士族の商法で、大失敗に終わった。むしろ彼の活躍の舞台は、韓国問題であった。

そのころ韓国では、清国の勢力を背景とする「事大党」が政権を握っていたが、これに対して、日本によって国政の改革を行おうとする朴泳孝、金玉均等の独立党の人々が、福沢諭吉の口添えで、後藤に泣きついてきた。

豪傑の後藤は、さっそくフランス公使に話を持ちこんで、百万円の軍資金を出させる話をまとめるとともに、会津の小鉄という侠客をつかって、たちまち七、八百人の壮士を集め、あとは韓国国王の密書さえ来れば、ただちに立ち上がる準備をととのえたのである。

このクーデター事件は、伊藤内閣に横どりされたばかりか、電光石火のごとき清国の袁世凱の出兵のため、ついに失敗に終わったが、これで男をさげたのは、後藤ではなく伊藤内閣であった。

このように後藤は、維新以来の経歴からいえば、伊藤や井上などは小僧っ子あつかいにした、政界の大先輩であり、ひとたび手につばして立てば、天下を震動する、実に快活な豪傑であった。その一方で金のほうはズボラなもので、当時近海航路に乗り合わせた実業家は、「後藤から金を借りられずに、まんぞくに旅を終わる人はいない」とまで言われたものである。それも相手に快感を与えつつ、無利息・催促なしの金を借りるのだから、後藤にはなんとも言えぬ人間的魅力があったにちがいない。

豪傑の後藤はあいかわらず、駿河台の豪壮な大邸宅に住み、いつも馬車を乗り回していたが、あるのは借金だ

けで、金は一文もなく、近所の仕出し屋から食事をとったり、庭の芝生を売って急場の小遣いにする始末。後藤が馬車に乗って出ると、出入りの大工が、門前で馬車に飛びついて、「旦那、あっしの手間賃はどうしてくれるんです」と、催促するありさまだった。

勝海舟も見かねて、いろいろ心配してくれたが、どうにもならぬ。最後に福沢諭吉が、岩崎弥太郎に交渉してくれた。岩崎と後藤は、維新前からの深い間柄であるが、毎度のことで、「もう後藤の尻ぬぐいだけは勘弁してください」と逃げようとしたが、福沢があまり熱心に説くので、結局、政府へ借金になっている炭鉱の払下げ残金と、その他の借金を合せて六十万円。これを岩崎が支払って、高島炭鉱を後藤から肩がわりすることになった。

これで後藤もやっと一息ついて、政治運動に乗り出す余力ができた。もっとも岩崎との約束では、今後毎年一万五千円の家計費を補助するが、その代わり、もう他のことでは一切金を出さないことになっていた。が、そんなことに頓着する後藤ではなかった。

そこに尾崎が飛びこんでいったのである。

尾崎が末広鉄腸（後の重恭）とともに後藤邸を訪ねて、条約改正反対のために、蹶起をうながすと、後藤は意外にもすこぶる乗り気で、「よし、そういうことなら、ひとつ老後の思い出に、全力を尽くしてやろう」とただちに快諾した。そればかりか「尾崎君と末広君と一致した計画なら、水火の中へでも飛びこもう。決していやとは言わぬ」という、実にうれしい答えであった。

折よく大石正巳がイギリスから帰って来たので、これも仲間に入れて、尾崎、末広、大石の三人が中心になって計画を練った。いろいろ相談の末、結局「後藤象二郎を首領として、藩閥政府に当たる」と決まった。

ではなぜ後藤が、こう簡単に出馬を承知したかというと、これには理由があった。それは星亨との間に、すでに話が通じていたからである。星が刑期を終えて、新潟監獄から久しぶりに出て見ると、せっかくあれだけ育て上げた政党は、火事場の焼け跡のような、惨憺たるありさまであった。

彼は自由党の暴動が、藩閥政治家からだけでなく、民衆の多数からも恐れられ、あるいは嫌われていることを知った。

「これではいけない！」――これからの政党は、今までのような有志家だけの運動でなく、民衆を味方にした

政党でなくてはならぬ。いや、民衆自身の組織した運動でなくてはならぬ。それにもう、自由党とか改進党とか、ケチなことを言っていてはだめだ。双方とも、旧怨を忘れて大同団結し、民力を集めて政府に当たるのでなくては、とても藩閥の堅城を、攻め落とすことはできない。

そういう趣旨で、後藤象二郎に渡りをつけていたのである。実をいうと、後藤にすすめて、東北地方に遊説に行かせたのも星だった。そして後藤が非常な元気で遊説からもどったところに、尾崎等が飛びこんで来たわけである。

旧自由党の方は星がおさえている。それに尾崎、末広、大石の三人が加われば、改進党系と中立系のまとまりもつく。そう見当がついたから、後藤がいよいよ大同団結の旗をかかげて立ち上がったのであった。

こうしてこの運動は急速に進み、十月三日にはいよいよ七十余名の在野政治家が、芝の三縁亭に集まって、懇親会をひらくことになった。席上、後藤は立って、悲壮な演説をした。

「近時日本の状況は、外には独立の国権ふるわず、うちには人民の生血まさに枯れんとし、歴史にも例を見ないほどのあさましい有り様となった。諸君よ、今やわれらの目は覆われ、耳は塞がれ、舌は縛られてあっても、われらがこの恐るべく、悲しむべき現在の事実を全く放任したら、日本国の運命はどうなるだろうか。諸君、もしこの一念におよばれるなら、この祝杯の酒は、決して諸君を、明治二十三年まで麻痺さすことはできないと信ずる」

こうして結束を固めておいて、翌四日には浅草の井生村楼で、改進党と自由党との連合懇親会を開き、さらに九日と十日の両日にわたって、連合演説会をひらく手はずとなった。

何しろ長い間、犬と猿のようだった両党が協力して、条約改正に反対するというのだから、世に与えた反響はすこぶる大きかった。が一方から考えれば、多年いがみあっていた両党の感情のもつれが、ただ一夜の宴会で解消できるだろうか。つまらぬことで喧嘩でもはじまっては大変だと、その晩も尾崎は「どうか無事に宴会がすんでくれればよいが」と柱に寄りかかって、大広間に入ってくる人々を眺めていた。

どうも会場の空気が、あぶなっかしく思われてならぬ。そこで、これは会を長引かせては険呑だと、膳がすわって酒が少し回ると、尾崎等はすぐ散会をうながして、さ

っさと会場を引き揚げてしまった。ところがその後で、とんでもないことが起こったのである。

散会したのちも、改進党の沼間と、自由党の星とは、残ってのんでいた。二人は妙な関係で、ともに幕末のころは洋学者として立っていたが、沼間の方が高い地位だった。そのころ星はまだ志を得ず、大森に母とともに住んでいたので、沼間はいつも星を「大森の百姓」と呼び捨てにしていた。それに沼間は、酔うと酒癖の悪い男だから、その晩もついその悪い癖が出て「おい、百姓、のめ」と杯をつき出した。

星としても傲岸不遜にかけては沼間におとらぬ。それに多年政敵として争ったのだからたまらぬ。「無礼者！のめとはなんだ」「のましてやるから、のめというのだ」「何を、失礼な。やい野郎ども、あとはおれが引き受ける。なぐり殺してしまえ」と星が配下に命じた。

壮士の面々は心得たとばかりに、灯を消すと同時に、真鍮のろうそく台を逆さにふりあげて、さんざん沼間をなぐりつけた。星は階段の上に突っ立って、頑張っている。その間に沼間をなぐり殺して、二階から隅田川に投げこむつもりだったというが、さいわい巡査が駆けつけて、沼間を救い出した。このとき彼はすでに半死半生のていだった。

夜おそくなって、この報告を聞いた尾崎は、怒りにたえなかった。今やっと両党の連合が成り、これから手をたずさえて藩閥政治に当たろうという時に、こんな内輪喧嘩など起こしては、せっかくの計画が水の泡になる。だからこそ、はじめから注意して、日の暮れぬうちにみんな引き揚げることを申し合わせ、若い連中すらこの趣旨を守ってはやく退散したのに、先輩の沼間が、自らこんな珍事を引き起こすとは何事だ——。

さっそく沼間を訪ねていくと、沼間は全身が腫れ上がって、身動きもできぬ容体だったが、尾崎は一応見舞をのべた後、「さて見舞は見舞だが、もしこのため、両党連合にヒビが入ったらどうするか。これをとり返すためには、あなたはぜひ連合演説会に出なくてはならぬ。喧嘩ではぶたれたが、連合にして国事に当たる精神は変わらぬということを示すために、戸板に乗ってでも、演説会に出なさい」といった。

それを聞いて人々は、尾崎は無情な奴だと怒ったが、沼間はさすがに男だった。「いかにも君のいう通りだ。年がいもなく、喧嘩なんかして、諸君に迷惑をかけて申し訳ない。死んでも演説会に出る」といった。

しかし沼間は結局、演説会場には現れなかった。医者にたって止められたからである。それも道理で、沼間はこれがもとで、間もなく死んだ。こんなことがあったため、改進党では、その日の演説会には、弁士を出さないと決定した。が、尾崎はきかなかった。「喧嘩は喧嘩だ。そんなことで、藩閥征伐の連合軍の足並みを乱してどうするか！」——彼は吉田嘉六とたった二人で、演説会場に出かけていった。

会場に行ってみると、正午の開会というのに、朝の八時には、もう満員になっていた。家の前には竹矢来をめぐらして、数十名の警官が警戒している。一町ほどはなれた小川にかけた橋には、梯子を横にして、ここにも数十名の巡査が、殺到する聴衆をふせいでいる。だが人の山をなしてワッショイワッショイ押しかける聴衆を制するのは容易ではなかった。

場内は、庭にまでさしかけの床をつくって、上にはテントを張ったから、昼間だというのに、演壇にランプをつけるという騒ぎだった。そこに尾崎が、吉田とともに姿を現すと、向こうがかえってびっくりした。

「おう尾崎君、なんで来たんだ」「何しにって、約束だから演説に来たんだ」「だって昨日、改進党からわざわざ、連合を絶つと申し入れて来てるぜ」「いや、沼間君がぶたれたとか、ぶたれぬかというのは、一個人の争いであって、天下国家の問題に関わりはない。改進党の他の人々がなんといおうと、我輩はただ一人でもふみ留まって、連合をつづける」

自由党の連中は尾崎の意見を壮とし、聴衆もまた堂をゆるがす喝采をもって彼を迎えた。

その日、彼は折悪しく気管支カタルにやられて、綿でのどを巻いていたが、自由党と改進党との連合をつづけるために、医師の勧告をしりぞけて登壇したことを述べ「もしこの一場の演説により、我輩の生命に別条があろうとも、藩閥打倒のためには、少しも厭うところではない」と述べた時など、聴衆はほとんど熱狂して、尾崎の万歳を叫んだのであった。

（次号・第九章に続く）

■ 財団だより

◇七月二十八日、小川和久氏（静岡県立大学特任教授・軍事アナリスト）による講演「日本政府には国民を守れない」を憲政記念館にて開催しました（ＧＩＩ共催講演会）。

◇八月十二日、「咢堂塾」第六回講義を開催しました。講師は、エコノミストの池田信夫氏。テーマは「失敗の法則―日本政治・経済の課題」。

◇八月二十六日、「咢堂塾」第七回講義を開催しました。講師は、作家・脚本家の井沢満氏。テーマは「日本語は国の防波堤」。

◇九月九日、「咢堂塾」第八回講義を開催しました。講師は、当財団研究員・ＩＴ統括ディレクターの高橋大輔氏。テーマは「政治とインターネット―その限界と可能性」。

◇九月二十六日、河本志朗氏（日本大学危機管理学部教授）による講演「九一一以後の世界」を憲政記念館にて開催しました（ＧＩＩ共催講演会）。

◇九月三十日、「咢堂塾」第九回講義を開催しました。講師は、明治神宮武道場至誠館館長の荒谷卓氏。テーマは「ポスト・グローバル資本主義に向けた社会作り」。

【訃報】

去る八月二十八日、当財団の副会長を長年務められ、また事業活動へ多大なるご支援を頂いておりました羽田孜・元内閣総理大臣が逝去されました。享年八十二歳でした。生前のご尽力に、当財団一同、深く感謝申し上げますとともに、心よりご冥福をお祈り致します。

羽田孜（はた・つとむ）
衆議院議員を十四期務め、内閣総理大臣、農林水産大臣、大蔵大臣、外務大臣などを歴任。二〇一二年に政界を引退。晩年は民進党長野県連名誉顧問を務めていた。

世界と議会（第五七八号）　定価五百円
発行所　一般財団法人 尾崎行雄記念財団
〒一〇〇―〇〇一四東京都千代田区永田町一ノ一ノ一憲政記念館内
電話　〇三（三五八一）一七七八
ファックス　〇三（三五八一）一八五六
ホームページ　http://www.ozakiyukio.jp
メール　info@ozakiyukio.jp